



## CFI ニュースレター C2022-09 鉢に満ちるほどの水

### [今月の聖書]

「さて、信仰とは、望んでいる事柄を確信し、まだ見ていない事実を確認することである。」(ヘブル 11: 1)

主は彼に言われた「安心せよ、恐れるな。あなたは死ぬ事は無い」そこでギデオンは主のために祭壇をそこに築いて、それを「主は平安」と名付けた。(士師記 6: 23,24)

ギデオンは神に言った、「あなたがかつて言われたように、私の手によってイスラエルを救おうとされるならば、私は羊の毛一頭分を打ち場に置きますから、露がその羊の毛の上にだけあって、地がすべて乾いているようにしてください。これによって私は、あなたがかつて言われたように私の手によってイスラエルをお救いになることを知るでしょう」。すなわちそのようになった。彼が翌朝早く起きて、羊の毛をかき寄せ、その毛から露を絞ると、鉢に満ちるほどの水が出た。

ギデオンは神に言った、「私をお怒りにならないように願います。私にもう一度だけ言わせてください。どうぞ、もう一度だけ羊の毛をもってためさせてください。どうぞ、羊の毛だけを乾かして、地にはことごとく露があるようにしてください」。神はその夜、そうされた。すなわち羊の毛だけ乾いて、地にはすべて露があった。(士師記 6: 36-40)

「どうか、私たちの内に働く力によって、私たちが求めた思うところの一切を、はるかに超えて叶えてくださることが出来る方に、教会により、またキリスト・イエスによって、栄光が代々限りなくあるように、アーメン。」

(エペソ 3: 20,21)

お元気でお過ごしでしょうか。今月は「鉢に満ちるほどの水」と題して祈りと信仰の実践についてお話ししたいと思います。祈りについて多くの著作を残した E.M.バウンズは「祈りとは、神との直接的取引なのです」と言いました。今年 7 月より「信仰とは」というテーマに取り組んでいます。ただ一方的にお願いする祈願では、聖書の真理を体得することができません。信仰とは神との交わりであり、ある意味において「格闘」なのです。このテーマにぴったりする人物は、旧約聖書のギデオンです。旧約聖書の中で彼がどのようにして登場したかという背景については、裏面の「ギデオンの舞台」で詳しくお話ししましょう。

彼は普通の青年であり、特別な地位も権限も持たない人物でした。また過去に大きな戦争をしたこともなく、また勝利の経験もありませんでした。しかし神はギデオンを選び、彼によってイスラエルに勝利をもたらそうとしたのです。その敵ミデアンの人々は強敵であり大軍でした。彼は大変恐れ、もし本当に神がおられるならば「印」を見せてほしいと祈り求めたのです。羊の毛はきめ細かくて水分を含みやすいのです。しかし羊の毛の上にだけ露が降りて、周りの草が乾いているなどという事は不可能です。しかし神はその願いを聞き入れたのです。羊の毛を絞ると「鉢に満ちるほどの水」がほとばしり出たのです。

あなたの人生においても、見えない神の御心を見たいと思った事はありますか。そのような祈りの取引に神はしばしばお答えくださるのです。そこで私たちは信仰の本質に触れることができます。この学びがあなたの生活に奇跡をもたらしますように祈ります。

(お知らせ)

\* 引き続きウクライナ支援募金にご協力ください。小さな祈りを積み上げていきましょう。

\* 地区集会について検討しておりますが、まだ感染拡大がおさまっていませんので、もしばらく様子を見て参りましょう。

\* 11月26日ウクライナ支援「メサイア2022」のご案内をいたします。ぜひご協力ください。

## [ギデオンの舞台]

小田 彰

ギデオンが登場する士師記はあまりなじみのない箇所ではないでしょうか。そこでモーセ以後のイスラエル民族の歴史について大まかにお話しいたしましょう。

### ☆出エジプトからカナン征服へ

モーセによってイスラエル民族はエジプトから脱出しました。それを出エジプトと言っていますが、エジプトから脱出したイスラエルの民は、シナイ半島ぐるぐる40年間回って、今やヨシュアと言う新しい指導者をいただき、ヨルダン川を超えて、約束の地カナンに突入しました。12部族はそれぞれの部族に従って土地が与えられ、分割統治して、イスラエルの国が建国されたのです。しかし、イスラエルの国には王様がいませんでした。モーセは王ではありませんでした。ヨシュアも王ではありませんでした。指導者でありましたが、「私たちの王たるべきお方は神のみ」と信じ王様を立てませんでした。



ところがヨシュアが死んでしまったのです。彼らは次の時代の指導者を失ってしまいました。そこで立てられたのが、士師(さばきづかさ)です。一時的に国政を任せられた人です。それぞれの時代にイスラエルの国が直面した問題を解決するために起こされた神の人でした。士師記には14人の士師が記録されています。カナン征服およびヨシュアの死から、サムエルが士師の職につき、イスラエルにはじめての君主制が採用されるまでの期間を含んでいます。

士師記は、イスラエル人が幾たびも繰り返し繰り返し神から離れたこと。悲しむべき国民の滅びていく姿に関する神の目から見た記録です。イスラエルの歴史の中で最も暗黒な時代の一つです。そこにギデオンが登場します。

### ☆人の弱さを担う神の愛

ギデオンの舞台となるのは、モーセがかつて羊飼いをしていたあたりで、非常に広いミデアン平原です。彼らは羊飼いたちの群れですが、強大な力を得て、たびたびイスラエルに攻め登ってきました。

イスラエルの人々の問題は、移住した地の偶像を拝んでしまう事でした。彼らはエジプトを出てから、荒野で、砂漠でただ神のみを仰いで生活していました。朝起きると露がマナになりました。夕方になると、うずらという鳥が飛んできました。彼らは「人が生きるのはパンだけによるのではない。神の口から出る全ての言葉による」という真理を知っていたはずなのです。しかしカナンの地に定住してもなく、バアル神を礼拝し、アシタロテという女神像を拝んだのです。まことの神を知りながら偶像を拝むという二重の宗教生活をしていました。彼らが偶像に傾くと、近隣諸国の敵が攻めてくるのです。(私たちの信仰が弱り曖昧になると、様々な試練が襲ってくることにしています。)

士師記の歴史は、単純に神を求め、悔いあらためて、へりくだって従っていくときには、彼らは祝福を受け、偶像に心を向けるときには、衰退していくというサイクルをたどっています。そのたびに神は、新たな士師をお立てになりました。

現代の私たちにおいても、日々の生活が恵まれて祝福を受けているとするならば、それは悔い改めと信仰の結果です。しかし霊性が弱り、喜びが失われているとするならば、あなたの魂がどこかでサタンの誘惑に負けているからではないでしょうか。

### ☆ギデオンの召命

ミデアンの敵がイスラエルに攻めてきました。イスラエルの人たちが畑を耕していますが、ちょうど麦の刈り入れの時になりました。ミデアンの大軍がラクダに乗ってなだれ込んできました。畑を蹴散らし、実った麦に火を放ち、そこで耕している人々を殺害していききました。「イスラエル人に向かって陣を取り、地の産物を荒らしてガザの付近にまで及び、イスラエルの家に命をつなぐべきものは残さず、羊も牛もろぼも残さなかった」(士師記6:4)と書かれています。

そこにギデオンという気の弱い青年がいました。主は振り向いて彼に言われた、「あなたはこのあなたの力をもっていつて、ミデアン人の手からイスラエルを救い出さない。私があなたを遣わしたのではありませんか」(士師記6:14)

### ☆戦いの前夜

ぜひ士師記6章から8章をお読みください。ギデオンと神との祈りの格闘が始まります。それが今月のテーマです。ギデオンに従う者たちは大勢いました。しかし神様は、300人にまで減らします。人間の力によらないで神の力による勝利を示そうとなさいました。その前にギデオンは、朝早く羊の毛をもって、「神共にいます」ことを確認しようとしたのです。

この学びが大いなる祝福となりますようにお祈りいたします。